

校長先生の初恋物語

第53話 帰ってきたアマーラさん

学校が終わって、とっくんは走って家に帰りました。かばんはげんかんにほおりなげて、またすぐに走って家を出ました。行き先は、去年アマーラさんが住んでいたあのアパートです。UFOを見て、なんとなく思ったんです。アマーラさんが帰ってくるのかもしれないって。どうしてそう思ったのかは分かりません。アマーラさんが宇宙人じゃないってことも分かりきっています。でも、なぜか心の中は、わくわくしているんです。

アマーラさんのアパートに着きました。でも、表札は「木村」ではなく、ぜんぜんちがう名前でした。そんなの当たり前です。でも、まだわくわくが止まっています。まだ期待してしまっています。次に行くところは決まっています。そうです。こづつみ山のほらあなです。

息を切らして、走り続けて、こづつみ山まで来ました。そして、あのガブのほらあなまで行きました。ガブはもちろん出てきません。ガブがどうなったのかはなんとなく理解していましたが、もうガブにあえないことも分かっていました。ガブがいなくなったほらあなも、もともと

は戦争中の防空壕(ぼうくうごう)だったということも、分かっていました。

ガブのほらあなの前まで来て、まっくらな穴の中に向かって声を出しました。なつかしいあの人の名前を口にしていました。もちろん、アマーラさんです。



「アマーラさん。」

ほら穴の中から、かえってくるのは、自分の声でした。アマーラさんの「とっくん。久しぶり。」を期待していたのに。そうじゃなかったことにがっかりしました。それでも何かを期待して、もう一回口にしてみました。

「アマーラさーん。」

すると、

「とっくん、久しぶり。」

アマーラさんの声が聞こえてきました。聞こえてきたのは、ほらあなの中ではなく、後ろからでした。

おどろいてふりかえると、そこには本当にアマーラさんがいました。とっくんは、うれしくてうれしくて、アマーラさんに抱きついてしまいました。アマーラさんは、びっくりしていました。

アマーラさんが帰ってきました。聞きたいことは山のようにはありました。UFOのことも聞いてみたかったし、初めてここであった時、どうしてほらあなの中で消えたのかも聞きたかったし、どうして何も言わずに行ってしまったのかも聞きたかった。でも、今一番聞きたいことはこれです。

「どうしてアマーラさんがいるの。」

アマーラさんは、話してくれました。アマーラさんのお父さんは、鹿児島県でお茶の仕事をしていること。去年は、お父さんがお茶の勉強をしたくて、このお茶の産地であるマンモス町にきたこと。お父さんのお茶の勉強が終わったから、鹿児島県にもどったということ。今年もそれで来たけど、またお茶の勉強が終わったら、帰らなくてはいけないということ。でも、しばらくはまた、マンモス小学校にいるってこと。

「それでもいい。うれしいよ、アマーラさん。」

アマーラさんはにっこり笑って

「わたしも、とっくんにまた会えてうれしい♡」

と言ってくれました。

つづく

次回予告

ミッタ再結成(さいけっせい)

